

# 強者の戦略

こんにちは。今回は京都大学の二〇一三年の問題です。

次の文は、『源氏物語』宿木巻の一節である。中の君(女君)を妻としていた匂宮(宮)は、時の権力者である右大臣(右大臣)の娘との縁談を断り切れず、しぶしぶながら承諾した。その婚儀は八月十六日の夜に予定されている。これを読んで、後の問に答えよ。

右大殿には、六条院の東の御殿磨きしつらひて、限りなくよろづをととのへて待ちきこえたまふに、十六日の月やうやうさし上がるまで心もとなければ、「いとしも御心に入らぬことにて、いかならん」と安からず思ほして、\*案内したまへば、「この夕つ方内裏より出でたまひて、\*二条院になんおはしますなる」と人申す。<sup>①</sup>思す人持たまへればと心やましけれど、今宵過ぎんも人笑へなるべければ、御子の頭中将して聞こえたまへり。

大空の月だにやどるわが宿に待つ宵すぎて見えぬ君かな

宮は、「なかなか\*今なんとも見えじ、心苦し」と思して、内裏におはしけるを、\*御文聞こえたまへりける、\*御返りやいかがありけん、なほいとあはれに思されければ、忍びて渡りたまへりけるなりけり。らうたげなるありさまを見棄てて出づべき心地もせず、いとほしければ、よろづに契り慰めて、もろともを月をながめておはするほどなりけり。女君は、日ごろもよろづに思ふこと多かれど、<sup>②</sup>いかで気色に出ださじと念じ返しつつ、つれなく冷ましたまふことなれば、ことに\*聞きもどめぬさまに、\*おほほかにもてなしておはする気色いとあはれなり。

中将の参りたまへるを聞きたまひて、さすがにかれもいとほしければ、出でたまはんとて、<sup>③</sup>今いととく参り来ん。ひとり月な見たまひそ。心そらなればいと苦し」と聞こえおきたまひて、なほかたはらいたければ、隠れの方より寝殿へ渡りたまふ。御後手を見送るに、ともかくも思はねど、ただ枕の浮きぬべき心地すれば、「心憂きものは人の心なりけり」と我ながら思ひ知るる。

(『源氏物語』より)

注(\*) 案内したまへば 〓 右大臣が人を遣わして匂宮の様子を探らせなされたところ。

二条院 〓 匂宮が中の君と共に住んでいる屋敷。

今なんとも見えじ 〓 今日が婚儀の日であると、中の君に知られないようにしよう。

御文 〓 匂宮から中の君へのお手紙。

御返りやいかがありけん 〓 中の君からのお返事はどうのようであったのだろうか。語り手の推測。

聞きもどめぬさま 〓 匂宮の縁談を気にもとめない様子。

おほほかに 〓 おっとりとして。

問一 傍線部(1)を、主語を明らかにして現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)(3)を現代語訳せよ。

問三 傍線部A・Bは、いずれも匂宮の気持ちを述べたものである。それぞれのよう  
な気持ちか、説明せよ。

問四 波線部における中の君の心理を説明せよ。